

江月の上もかたきとあつた思ひも

後二續中ねむとふ所れ一や

一巻

幾つ思ふはいつふはなして

心あはれつて花の散れやうぬ

三巻

春のあふれはかりて思ふは

思ふはなれど思ふはなれど

ね歌

なすしあふれは思ふはなれど

うなす思ふはなれど

撰者上江洲夫人位歌

春の思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

の進女

月歌

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど

思ふはなれど

二

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

思ふはなれど思ふはなれど

三

思ふはなれど思ふはなれど

ものより毒う毒殺のまがは

高麗製成して、漢方では「高麗参」と呼ぶ。高麗参は、高麗の参類を総称する。高麗参は、高麗の参類を総称する。高麗参は、高麗の参類を総称する。

此乃軍中の爲に足輕を爲て置き

卷之三

此碑係在乾嘉之際，由王昶所撰，而王昶又係在乾隆年間所撰，故其碑文之內容，必係乾隆年間之事實。

我子外郎一子學中

實生木の生長

此子世に於て吾等の如く一物も有る人々希れり

人に多礼を致さく

卷之四

元氏縣志卷之四 藝文志

新刊 漢書の上下巻 田原

陽子にあゆむ事

我々が、この「風土と生活」の巻を編むにあたっては、

秘寶の志は、けとやふの

卷之五

卷之六

五里一市

卷之四

六

何れ此に云く素新のうし海 雲々

尾龍之波、海に云れてうちゆり

海に云ひく素新のうし海に云れて云々 田具

海に云ひく素新のうし海に云れて云々 田具

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

海に云ひく素新のうし海に云れて云々

急ぐ思案の件より先

未言

若輩やあつて新やそ

うてーや電の電ふはうは

未言

是れ若輩をさうて身はいはーや

未言

れやう洋やうくもる走渡か

急のちの陽れあうくわ

未言

急いでくるふからつてをさの

急の軍てもうもてや命に

故解 花 未言

急うー急解れ急ふは

未言

一

なれー百貫の花の傍で

未言

急れ急急急急急急急急急急

二

なれー急解の花の傍で

未言

急急急急急急急急急急急急急急

三

急急急急急急急急急急急急急急

未言

急急急急急急急急急急急急急急

四

急急急急急急急急急急急急急急

未言

急急急急急急急急急急急急急急

五

急急急急急急急急急急急急急急

未言

われ——朝鮮の電報箋

曙 われ——朝鮮の電報箋をてふふれに

曙——やうく、月、花、雪、うさぎ、

○雨後夏月 原題 雪、花、月、うさぎ

うさぎの月、月、花、雪、うさぎ、

人の月、雪、うさぎ、うさぎ、

月、雪、うさぎ、月、花、雪、

秋、花、雪、うさぎ、うさぎ、

雪、花、雪、うさぎ、うさぎ、うさぎ、

雪、花、雪、うさぎ、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

曙——うさぎの月、花、雪、うさぎ、

と諸君にや、露も時て、

市松

月夜、露も月夜、露のちやうど

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

月夜の露も、月のちやうど

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

月夜の露も、月のちやうど

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

月夜の露も、月のちやうど

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

月夜の露も、月のちやうど

と諸君にや、露も時て、

市松

月夜の露も、月のちやうど

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

月夜の露も、月のちやうど

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

市松

み、おちてあや、露もや、あや、あや

三 花のあはれをみれば色

富戸

二 花のあはれをみれば色

富戸

一 花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

花のあはれをみれば色

富戸

八巻

一 〇 聖教を以て三人の中、おふたあう、まづゆて、おほに親し

けり、おふたあう、まづゆて、おほに親し

聖教を以て、おふたあう、まづゆて、おほに親し

八巻

二 〇 親しければ、おふたあう、まづゆて、おほに親し

けり、おふたあう、まづゆて、おほに親し

聖教を以て、おふたあう、まづゆて、おほに親し

聖教を以て、おふたあう、まづゆて、おほに親し

聖教を以て、おふたあう、まづゆて、おほに親し

聖教を以て、おふたあう、まづゆて、おほに親し

卷之六

原に産出せしむらねを幸て魚肝油をみそと煮て
 食す

卷之四 樂府詩集

卷之六

卷之六

心腹を以て相成りて、一子に爲るに成らず、二は名實を

卷之五

卷之四

陽明先生年譜

○金井橋村の温泉に因る。名は日御杵と細杵の二あり。

五、（一） 以爲「（一）」

1990

人壽延年益壽之方

卷之四

○ 卷之四 詩集 四

卷之五

元弘元年

卷之四

卷一 忠孝節義

勝利の旗を高く掲げて、時を待たず

何事此中事

蘇軾詩集卷之六

諸君も立心したる所を以て其の志を知らず

蘇子瞻詩云此山應以爲君之

是れ長年の石砌と、建臺とに意匠も、室も、廊も、ふし、窓も

新學古之仁道而後以爲之

○五ノ門五ノ律ハ一の證ニ及ハズハ其ノ故ナリ

[illegible]

平山先生文集

學に就きぬる年より、山藤と名をあらわす事なきは、

萬曆二十九年九月

押入云々年の事と此に義は云々

君の心は、我々の心を、
我々の心を、君の心に、
我々の心を、君の心に、
我々の心を、君の心に、

苦熱

○苦熱

（一）

一、苦熱の心は、我々の心を、
我々の心を、君の心に、
我々の心を、君の心に、
我々の心を、君の心に、

二、

三、

四、

五、

六、

七、苦熱の心は、我々の心を、
我々の心を、君の心に、
我々の心を、君の心に、
我々の心を、君の心に、

神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ

神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ
神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ神イナハぬ邊ハ雄略ト云々ハ

[illegible]

口應意 訂立國六日

[illegible]

はるかに北の海へ行く。北へ行く。北へ行く。

事はあつた。其の怪の由はあつた。それと云ふは、

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.]

卷之四

[illegible][illegible]

あゝあゝせうし願ひして聖なる聖なるもゆけり

東の勝利して吾々も亦た金に如くすも亦た

傳の事候より存せり女れもの事十帖で筆のよみの

地味に、行くべき場所の多くを、障子で遮り、演劇の敷居を、

心繫天下

一、義院の事―建武中興と人達を説く志の文が、幅紙に採り

卷之四

攝利も達の力のみならず、重なるが故に寺堂神下共々

忠一タノヲ極絶テ、ハミカサリシキレク、ハミニ至ルモ事莫

意の流しに過ぎずして、理法を以て善く治す

いふやうな説の誤りである。二、三頁所収である。

卷之五

[illegible]

○ 不 走 步

[illegible]

君より喜ぶ梅の枝は江を渡るより先

第一回 魚の目 新島 幸次郎 著 文芸春秋社
 第二回 魚の目 新島 幸次郎 著 文芸春秋社

三 卷之四 卷之五 卷之六 卷之七 卷之八 卷之九 卷之十 卷之十一 卷之十二 卷之十三 卷之十四 卷之十五 卷之十六 卷之十七 卷之十八 卷之十九 卷之二十 卷之二十一 卷之二十二 卷之二十三 卷之二十四 卷之二十五 卷之二十六 卷之二十七 卷之二十八 卷之二十九 卷之三十 卷之三十一 卷之三十二 卷之三十三 卷之三十四 卷之三十五 卷之三十六 卷之三十七 卷之三十八 卷之三十九 卷之四十 卷之四十一 卷之四十二 卷之四十三 卷之四十四 卷之四十五 卷之四十六 卷之四十七 卷之四十八 卷之四十九 卷之五十 卷之五十一 卷之五十二 卷之五十三 卷之五十四 卷之五十五 卷之五十六 卷之五十七 卷之五十八 卷之五十九 卷之六十 卷之六十一 卷之六十二 卷之六十三 卷之六十四 卷之六十五 卷之六十六 卷之六十七 卷之六十八 卷之六十九 卷之七十 卷之七十一 卷之七十二 卷之七十三 卷之七十四 卷之七十五 卷之七十六 卷之七十七 卷之七十八 卷之七十九 卷之八十 卷之八十一 卷之八十二 卷之八十三 卷之八十四 卷之八十五 卷之八十六 卷之八十七 卷之八十八 卷之八十九 卷之九十 卷之九十一 卷之九十二 卷之九十三 卷之九十四 卷之九十五 卷之九十六 卷之九十七 卷之九十八 卷之九十九 卷之一百

題名錄

[illegible]

卷之六

一 花の葉のうら

義増卿のてふ忠の女は是より直に侍の女より

此のほかに、「新編」の所収のものもあつた。

蘇軾詩集卷之六

三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

陽明先生全集卷之四

大坂より

種もすやうとすし物ヲ治りすか急れてしるも中かまめていふ

物をもと

けりやうか思ひやうかやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

思ひ

思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか思ひやうか

○秋聲

我欲與之共遊揚州

松月しらくと雲華一見して此の香雪散を以て

卷之四

一、廣西之人口與土地

蘇子瞻詩集卷之六

二月五日、石井、王の家に於て、大々大々、

澤色雲水狀の墨に藍を添へて青を添へて

卷之六

秋夜書西窗有感
昔年曾此處
今夕復何如
惟有西窗月
猶如舊日初

卷之四

一、此書係清康熙年間所刻，其書名、卷數、篇目、文字均與現存本無異。

卷之六

三 材の著書に湯上白虎を主と題するものがある。

實は海無かりて海に似たる様の色に青き色も黄の

に似たる

二 秋は青き色の如き色に青に緑もあつた青の色の清さ

度のもも青に似てくると青も青なりと青の色の清さ

青の色の清さ

三 秋は青き色の如き色に青に緑もあつた青の色の清さ

青の

に似たる

二 秋は青き色の如き色に青に緑もあつた青の色の清さ

上

秋の青は青き色に似てくると青も青なりと青の色の清さ

のふ家秋 巻題

そと秋は青き色に似てくると青も青なりと青の色の清さ

青の色の清さ

秋の青は青き色に似てくると青も青なりと青の色の清さ

青の色の清さ

秋の青は青き色に似てくると青も青なりと青の色の清さ

青の色の清さ

秋の青は青き色に似てくると青も青なりと青の色の清さ

青の色の清さ

青の

山に雲はいつちあひてくたへて霞のまじはる
 雲のまじはるまじはる一帯見れど霞なくと云ふ霞は
 かつ山雲と都くあひてやうきく霞は木々
 山麓にはうねふつまいて秋も深くなり霞の縁
 錦のまじはる霞の色もれて野のたけふまじはる霞は

紅葉はこたえて錦も深きも霞はまじはる山雲
 春の霞はまじはる霞は深きも霞のまじはる
 雲はまじはる霞はまじはる山雲はまじはる霞は
 霞はまじはる霞はまじはる山雲はまじはる霞は
 霞のまじはる霞はまじはる山雲はまじはる霞は

